

特31

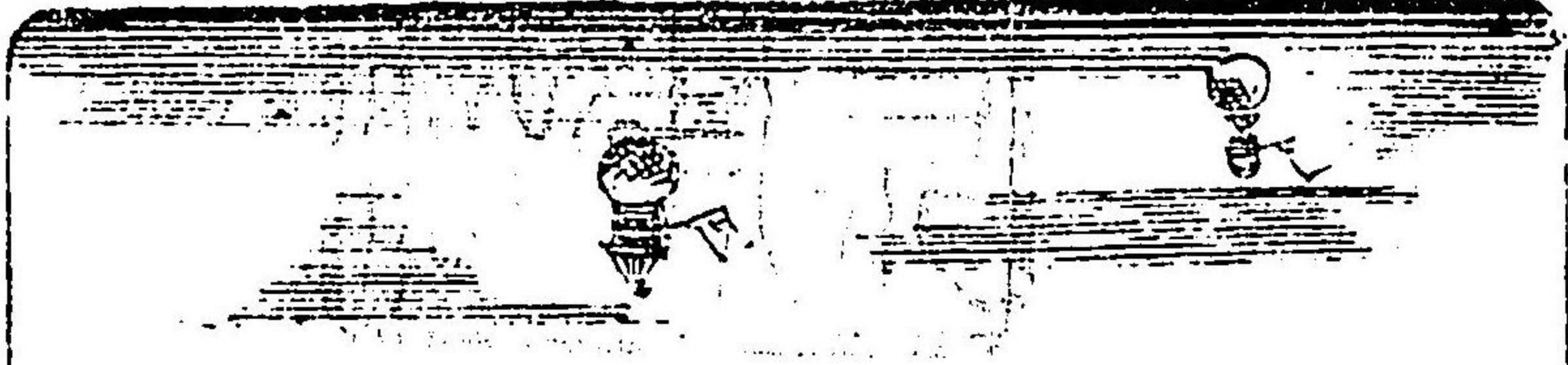
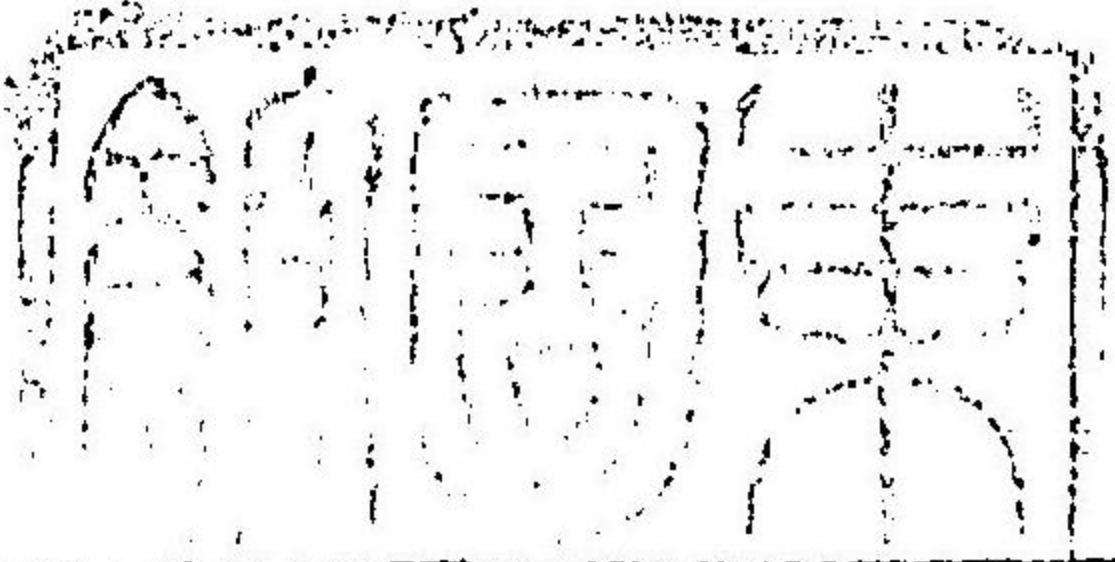
599

世界不思議

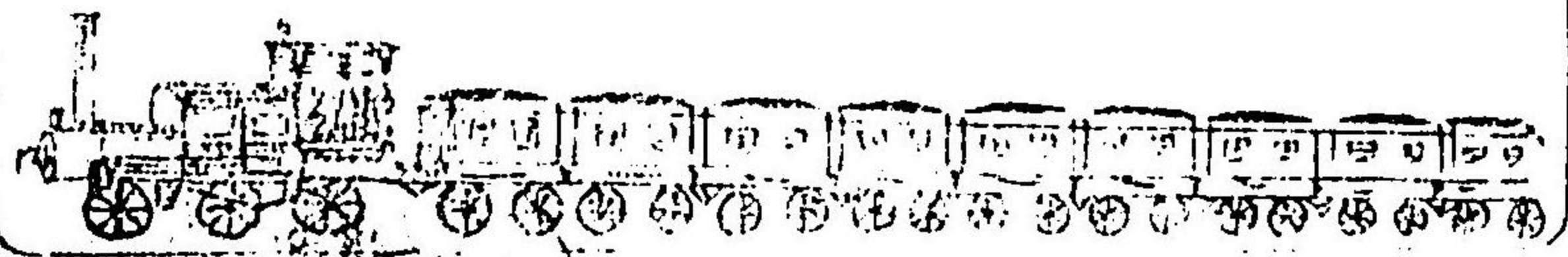
大日本教育會館			
室		第	
	三		三
四	〇	二	七
冊	號	架	函

長
行

作 21
599



茶



萬國音談

名 一

七不思議

青木輔清 撰

明治 六年

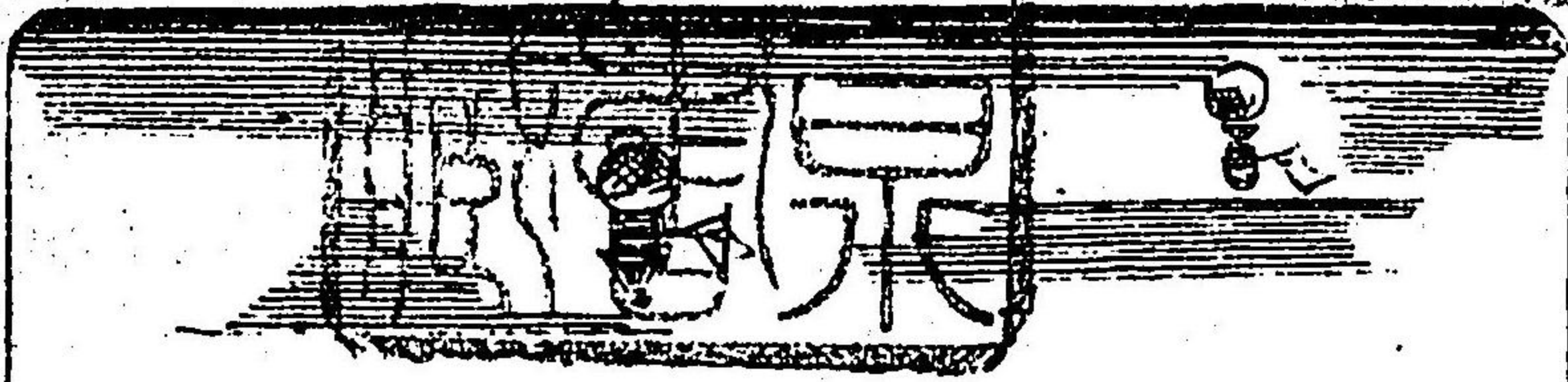
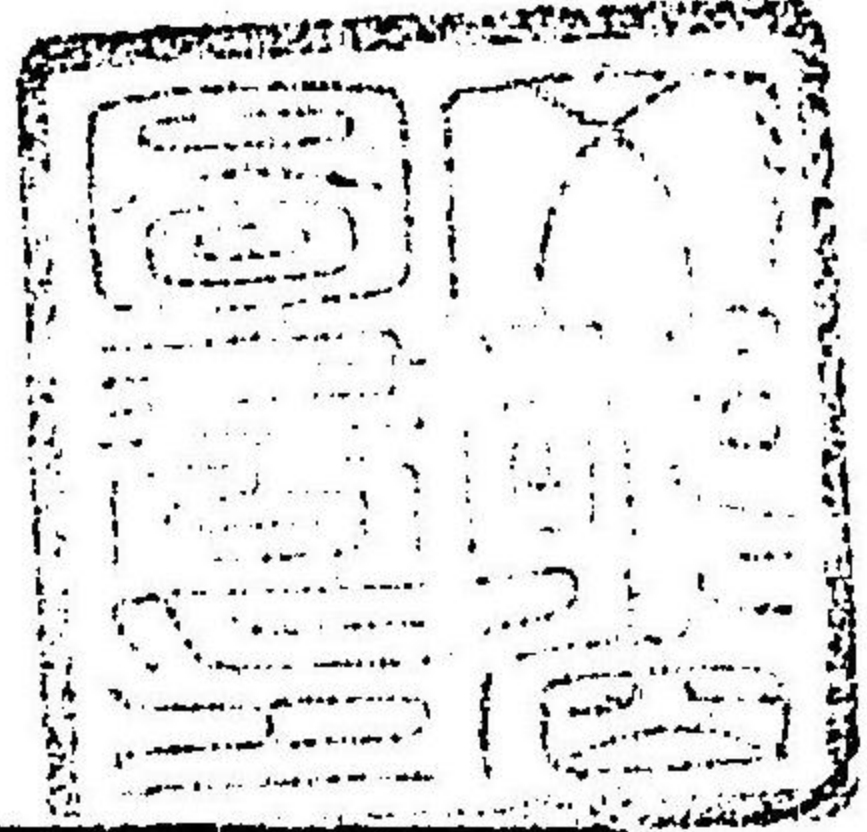
東京書林 前

神明

甘泉堂 味

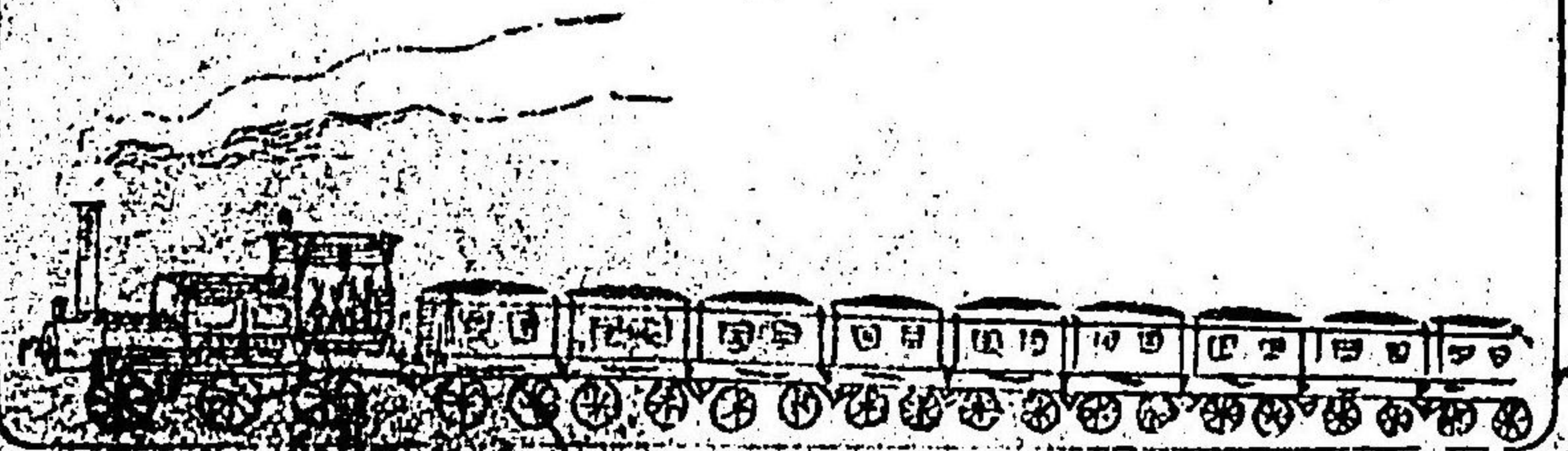
特31
599

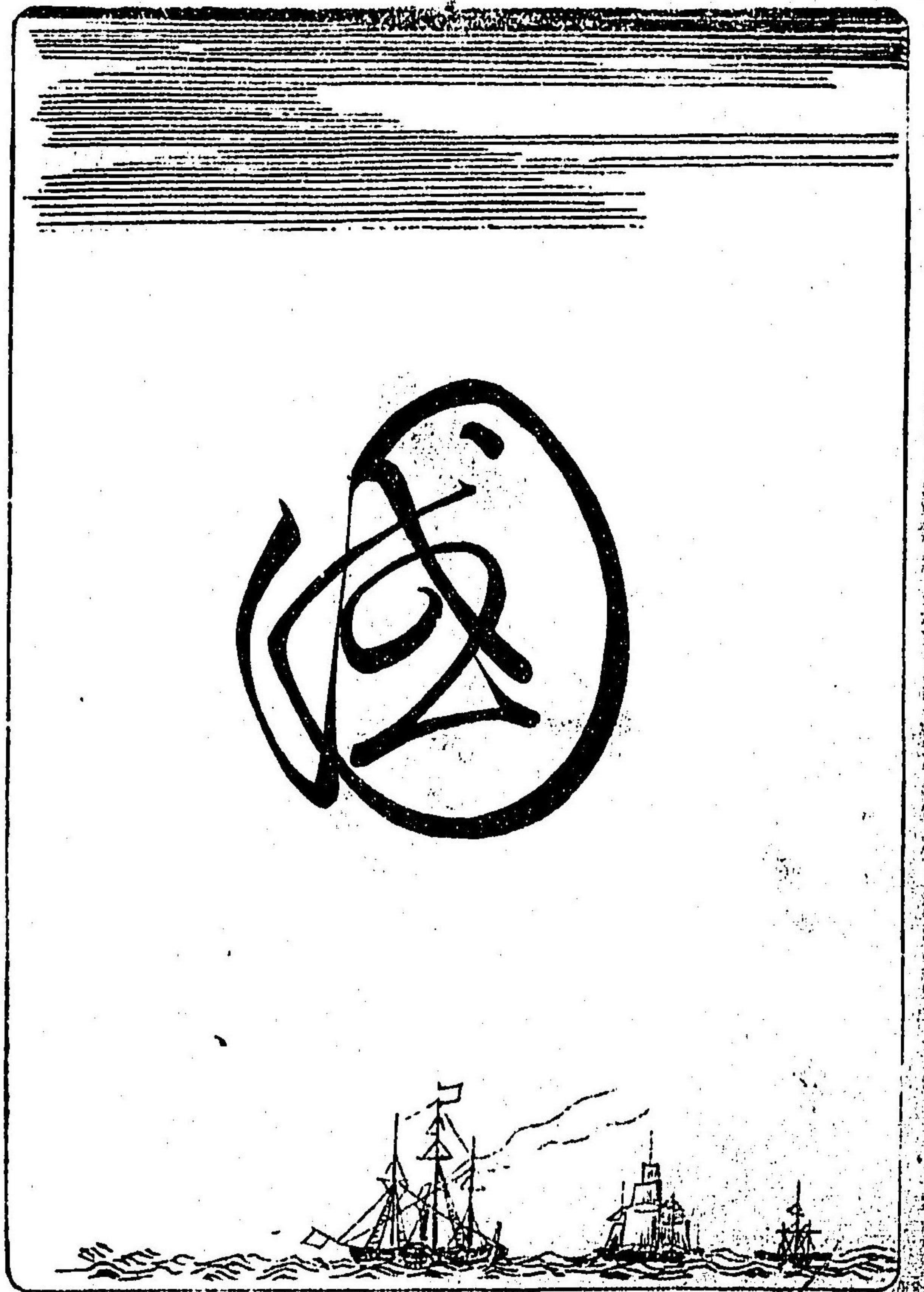
東國音韻



東國音韻

東







目錄

卷之一

世界開闢の事

羅百爾高塔の事

西洋帝の始并よ巴比倫城の事

空中の釣園圃并よ尼々微城大陽廟の事

地中海巨像の事

支那万里の長城の事

○埃エチオピア及國石塚の事

○都兒トルコ格死海の事

根樹の事

瑞士國スイツル巨燧雪中に埋多は人を救ふ事

并に犬の人よ切らる事

入水器の事

入水衣の事

卷之二

英國倫頓ロンドン地下蒸氣車鑛道の事

英吉利鑛管橋の事

方今世界中の五大業

其一 倫頓ロンドン川底の往来

其二 モンセニール山鑛道の事

其三 スーエズ地峽掘割の事

其四 大西洋海底傳信棧の事

其五 北亞米利加南北に貫く鑛道の事

暹羅シヤムの浮府フキマツ

目錄終

This book isn't
interesting

萬國叢談卷之一

一名世界七不思議

○世界開闢の事

青木輔清 纂輯

大古鴻荒の世をいひまきも載籍あく其事歴も茫
昧として辨難しとんども今唯西洋の書に於て
るは彼国の紀元前四千零四年彼國は唯西洋の
國の教祖なる基督といへる人の生きたる年と
元一年となし頃々又數ひて今迄の生きたる年と

萬國叢談 卷之一

申の年を彼國の千八百七十二年あり此紀元
一、年より古き紀元前幾年と古
遊、て云ふ故に紀元前四千〇四年といへば即
ち當申の年より五十八百七十七年まへのこと
あり

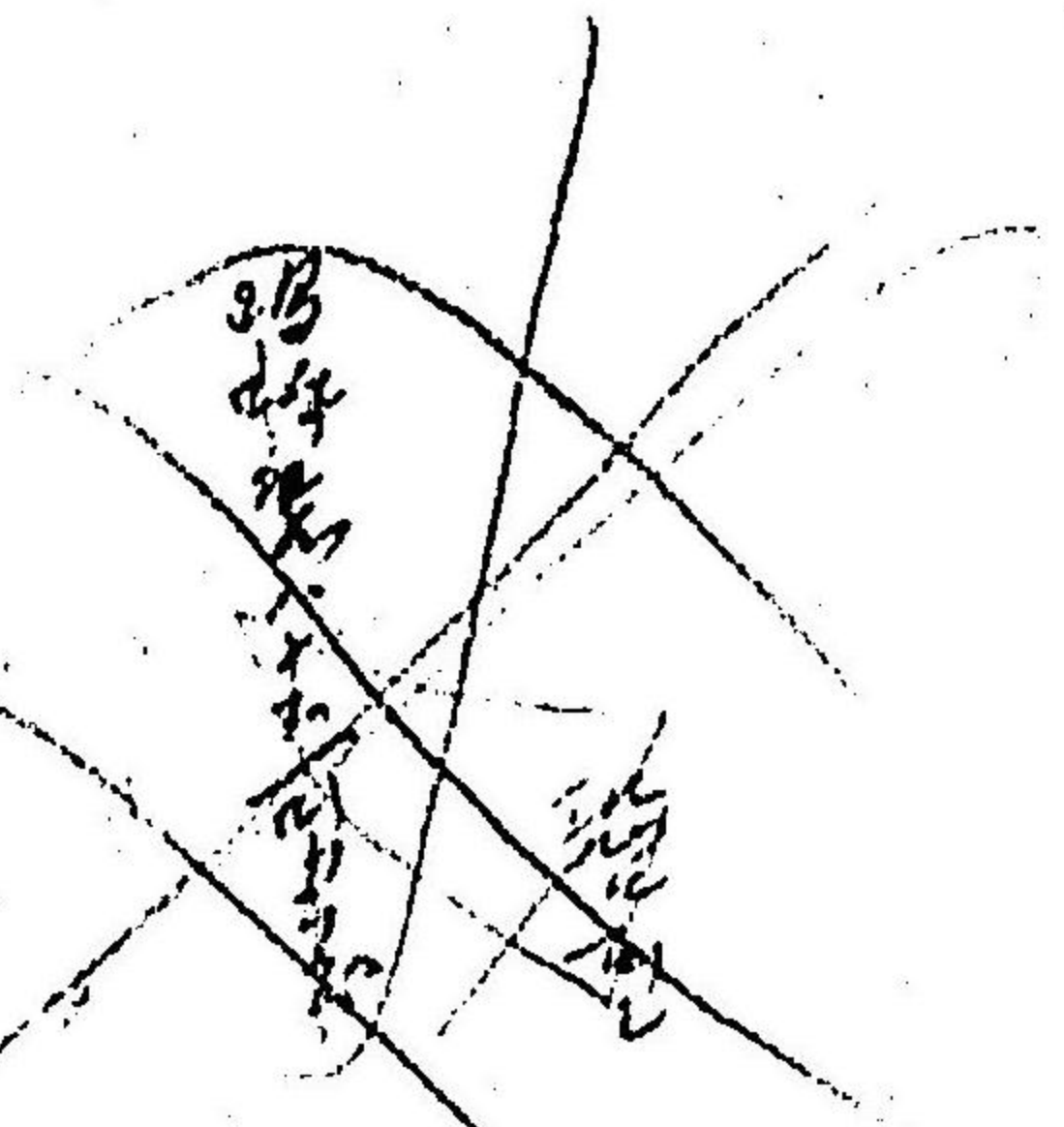
の古より上帝始て亞當、換窩といへる二人の男女
を亞細亞洲の西部に降生玉ひり此兩人を初癸
拉的といふ河の畔に浴する易典の園圃に住居
たり素より此地を沃饒あるを以て五穀自然と
實を結び食物不自由なく又宮室もあらず衣服
もふく嘗て神人の間み交り禽獸と雜居して人

亞當換窩の兩人
易典の園圃に
住居の苗

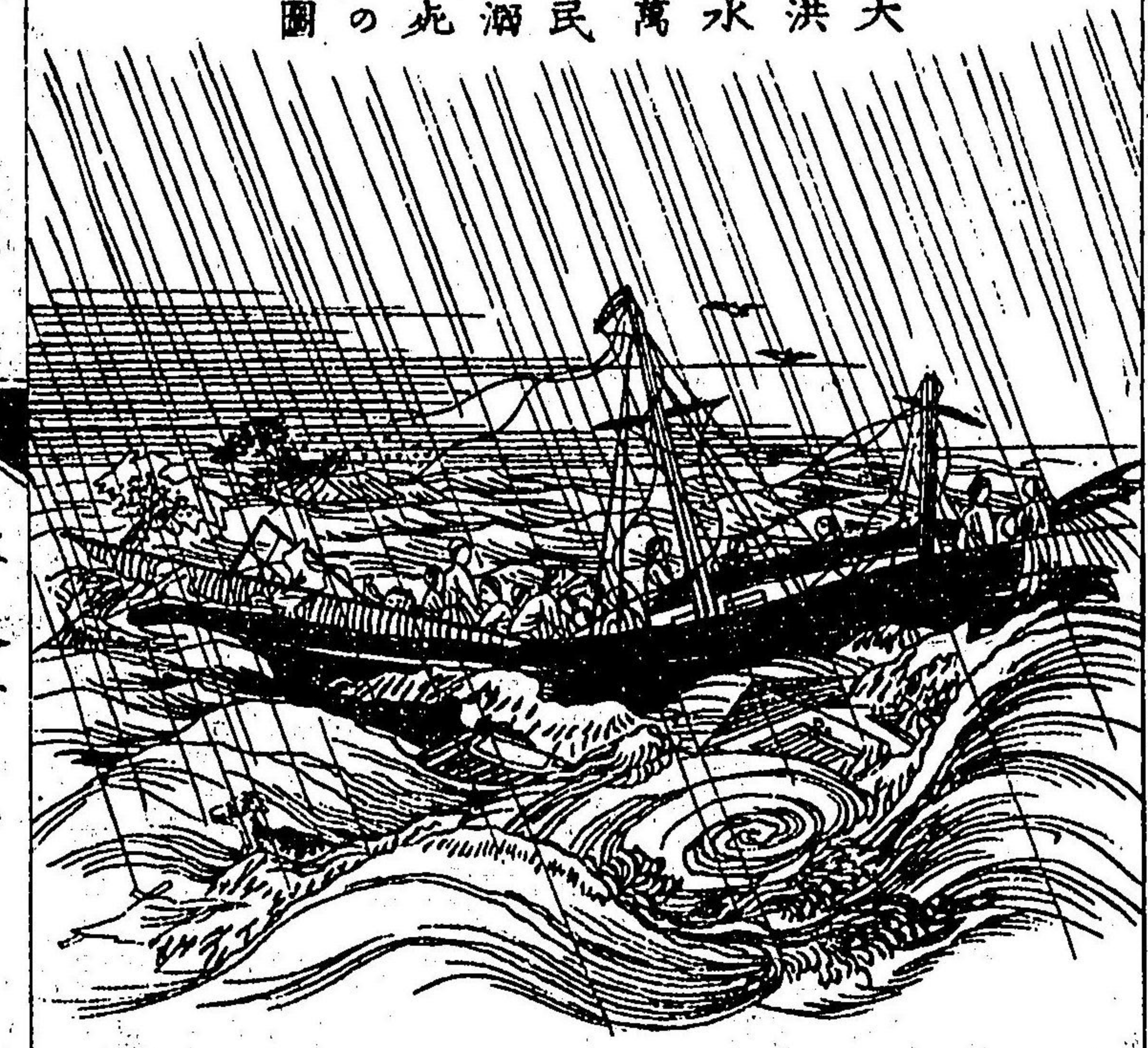


間、疾苦ありあつたを
知、欣然として打過
し、其後相偶て遂に
三人の子を産めり其
長子を卦音といひ其
次子を衣伯といひ其
三子を色斯といひ此
子孫遂に数百万人に
あり、是れを換窩拉的

何ッレ上ノ事ヲ
爲シヨシトシ
ヤ世ノ事トシ
以上ノ事ヲ
考テシケル



大洪水萬民溺死の圖



河の近傍に都府村落を建てて之に住居し大に繁栄せしが其後漸々淳朴の風を失ひ上帝を輕蔑し無道を行ふに至り此に於て上帝大に怒り給ひ断然萬類を亡滅せんとせ然るに獨り諾亞とレヘス人の一族善良あるを以てあれと存く後來の血種とあさんと上帝より夢よ大洪水の事んと告知せ玉へけきを諾亞に其命を隨ひ巨舟の如き一大画を造る其親族と各種の動物の一偶を收めて共々其中に入り四周を密封

て之を避くるの用意をあき果して十一月より陰雨始り累月止まらば遂に洪水大陸を汎濫激浪天を蹴る如く万里茫洋とある此

於て人畜悉く溺没して萬類一も遺るものな
 り。諾亞の巨舟を数月洋中へ漂流せし翌年三月に
 至て雨漸く治り水漸く沈没し亞義尼國の
 亞拉喇徳とりへる高山の巔に漂着し是れ世界
 創造てより千六百五十六年後の夏ありと云
 此の時諾亞の親族をよび動物とも此の巨舟
 を出て其山の近傍に生業を営む動物す。後て
 四方に延蔓る諾亞は三人の子にり其長子を設
 模とり其二子を波模とり其三子を日肥徳

とり皆相俱に亞拉喇徳山の南に連ありある
 支那爾とり地は赴き幼癸拉的河の頭に住居
 し是より人間復び繁衍あり故に之を新世界人
 類の基祖とあはせ

西洋あてを此洪水前を古世界とり此洪水
 水より方今に至るまでを新世界とり

○羅百爾高塔の事

前章に掲載する如く諾亜の子孫は支那爾の地
 に住居し漸く繁衍し嘗て大洪水有りて
 を聞傳へ一旦罪を天に獲る支那は必
 既往の如く大害を被る事と有りて大
 恐怖をなす皆打寄種々評議して豫め之を救ふ
 の道を索むれども他は手段なく漸くして一
 奇策を考出せり是を以て高き塔を建置し洪

水来る事と有りて皆相俱ふ此の塔は由て天に
 上り其害を避んとする事なり遂に評論此処に
 決し先埃突拉的河の畔に其地を撰び堅固の基
 礎を掘りて日光を以て乾燥する尾と粘土或
 は瀝青の類を以て次第に累々積重ね数万の工
 夫雲の如く相集り夜を日と繼て艱難勞作し不
 日数層を落成げ其頂上を登りて地下を臨む時
 其距離遙し最上天より登りて氣意おそ
 ども天を仰望する事と有りて日月星辰依然とし

て其距離初免地下みて見し時と異あり事ふし
此は於て衆人愕然とし神もまた其暗愚を罪
音声を混して其言語を通ぜざりしむ工人塔の
上は在て尾を持来るべしと呼べバ塔の下は在
る工夫を其語を誤りて之は濼青を與へ又粘土
の欠乏を呼べむ此所は鋸を持来る等の類俱小
其声嗚として恰も嬰兒の啼號が如く少くも其
意を解ちと能く皆大に之を恐怖せ工夫一人
もあらず小来る者あし此は於て愚民を天小上る

の希望を廢し是より人民党徒仲間を結び四方
小轉移あとを始む乃ち設模の子孫を尋く埃
拉的河の近邊は苗まりて村落を建東方諸国を
拓く波模の子孫を西に向て出立く亞弗利加洲
に到り始めて埃及国を建つ是亞弗利加洲の祖
り又日肥徳の子孫を歐羅巴洲に渡り始めて希
国を立る是歐羅巴人の祖あり
上よりへる高塔を羅百爾の塔と名くは言語混
乱して弁じ難し是世界創造以来の一奇物と云べ
るの義あり

上ノ掲載スル処ノ物を皆四千年前ノものと
 此モ其證據ヲ得テ知ル證アリトバといふ
 也今又埃癸拉的河ノ畔ニ丘陵アリテ此邊
 ヲ穿ツ時古瓦ノ碎片許々出ルものと
 其製ヲ觀ル小皆日光ニテ乾燥スル物ニ
 上ノいふ所ノ物ト頗ル符号セリ因テ此地
 大古羅百爾ノ塔ノ墟址ニあるものと
 證トスルニ足マリ

○西洋帝ノ始并バ巴比倫城ノ事

上ノ記載ニ埃癸拉的河ノ頭リ巴百爾高塔ノ近
 邊ニ土着スル設模ノ子孫遂ニ繁行テ都邑村落
 ヲ建テ一國ヲなシ之ヲ羅鼻落尼亞トシ其大
 祖ハ泥模路達といフる諾亞ノ曾孫アリ此人
 甚ダ剛勇ニテ能ク獸ヲ驅リ荒地ヲ拓キ遂ニ近
 傍ノ強ク國々ヲ討從ヒテ自ら帝ト稱セリ是西
 洋帝ノ始ナリ是より埃癸拉的河ノ頭リニ於テ

巴比倫城
遺跡ノ畝



巴比倫城を築造
あり其宏大峻麗
ありまゝと実人
目を驚うまは餘
りり其城壁の高
厚き其周囲百里
余其高さ百尺余
四方に城門二十
五其内は二百五

巴比倫城内の金像
猶太人跪拜の畝



十余の高臺あり
其壁の上へ坦
途にして馬車六
輛を並べ奔りし
むるとりつど
更に左右に顛墜
の恐おし実夫
下は稀ある大城
あり

羅鼻落尼亞王、大兵を率ひて猶太國を攻て其國民を皆生捕とあしてより巴比倫城内に黄金の像を安置し以て人民は拜まじむ其像の高き十二丈余若し之を跪拜せざる者られバ直ち召捕て火刑を行ひしと云ふ

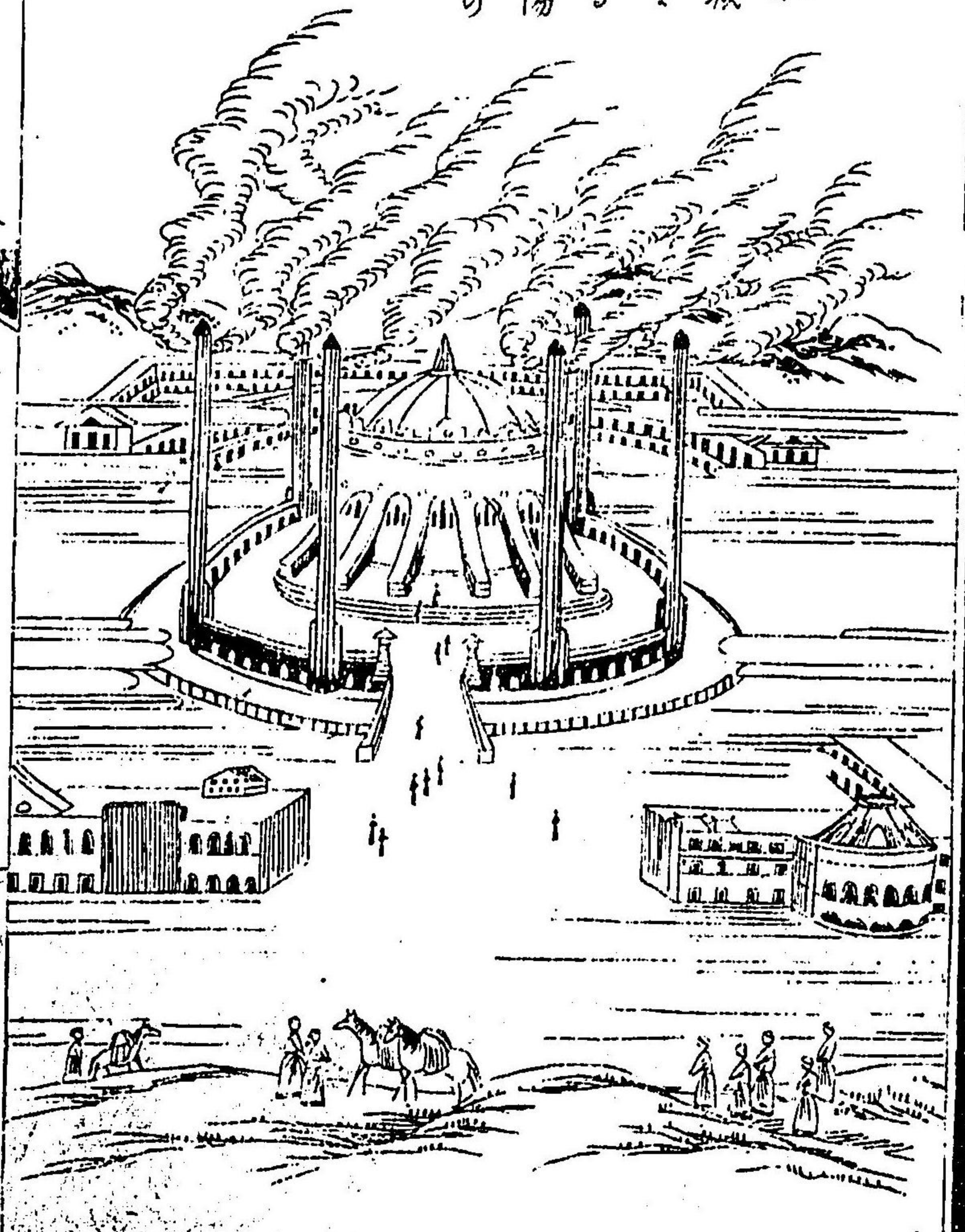
○ 空中の釣園圃并ニ微城大陽廟の事

亞細亞土耳其の内今古爾的斯丹と稱する所往古々亞西里亞といひ羅鼻落尼亞國の近隣あり

諾亞の孫即ち設横の子亞蘊尔と云ふ者始て此國の君とあり尼々微城と稱する宏大無邊の大城を築き此王多り之を繼いで王位を昇る者を尼奴と云ふ尼奴卒する及で其后西弥辣未斯王位を昇る此後甚だ剛勇の人として近傍印度諸國を討從へ其威徳日々と盛なり羅鼻落尼亞國を併せ其部中王の宮室を浴て一の園圃を石の柱を擡て空際を造り造らざるを望め景色勝麗くして其奇絶あはと宛

天より懸るが如し其中より山水の趣を備へ各
 種の草木榮を競ひ百花実を結び実又人智の及
 バざるも似たり真は是世界七奇の一あり
 又尼々微城内は太陽廟と稱する奇巧の大廟に
 り其房舎甚ぞ壯麗其四圍は墻壁よりして其壁の
 間六本の大柱あり其柱中を空虚よりしてその
 基は煤炭を燃し烟火を其頂上より吹出く黒烟空
 中へ漲る実又天下の一奇觀あり

尼微城内大廟の陽



○地中海巨像の事

亞細亞洲と歐羅巴洲の間は在る地中海の中、
樂徳とソム島あり此島往古より獨立國にて、土地
の酋長之を支配し其首府をまく樂徳とソム諸
國の商船湊集て人家り隨分稠密く最も豐饒の
地あり此島の港口は大古銅を以て鑄る巨像
を建ふり之をコロネユスとソム其高さ七十尺
余兩足は海中より石を以て築きたる二つの基



地中海ロデス島
港口に在り
巨像の番

礎を踏んで立其跨下を高濶として巨艦出入を
聊差支あり其手の指の太さを大人兩手を延
く猶合抱ありて其全體の大きさを之
准て知る愈く遠方より望む時を其精巧比類
なく実又天下の奇觀あり
往昔此国の王鑄工カルレスと云ふ者を棟梁
命ト力を費せんと十二年して尚しよと成む
半途よりて死を尋てラセスと云ふ者全く工を
終ふ其肉身を全く空洞めて中は大石數を置

を鎮とふして其傾倒を防ぐ其後六十年余の星
霜を経て地震の爲に傾倒を海中に阜陵をなす
あと八百年再び之を建んとするものもあり
しが今より一千二百年余前小亞刺比亞国の
此地を侵掠し其巨像を破碎して駱駝九百頭
駟て自分の国に運輸しと云ふ
此像を前の畷の如く左の手は燭を捧げ夜を則
ち燈明臺の代となりて海船を照し其鐵路を便
ふらしむ其火を點さんとする時を足の内を旋

世端

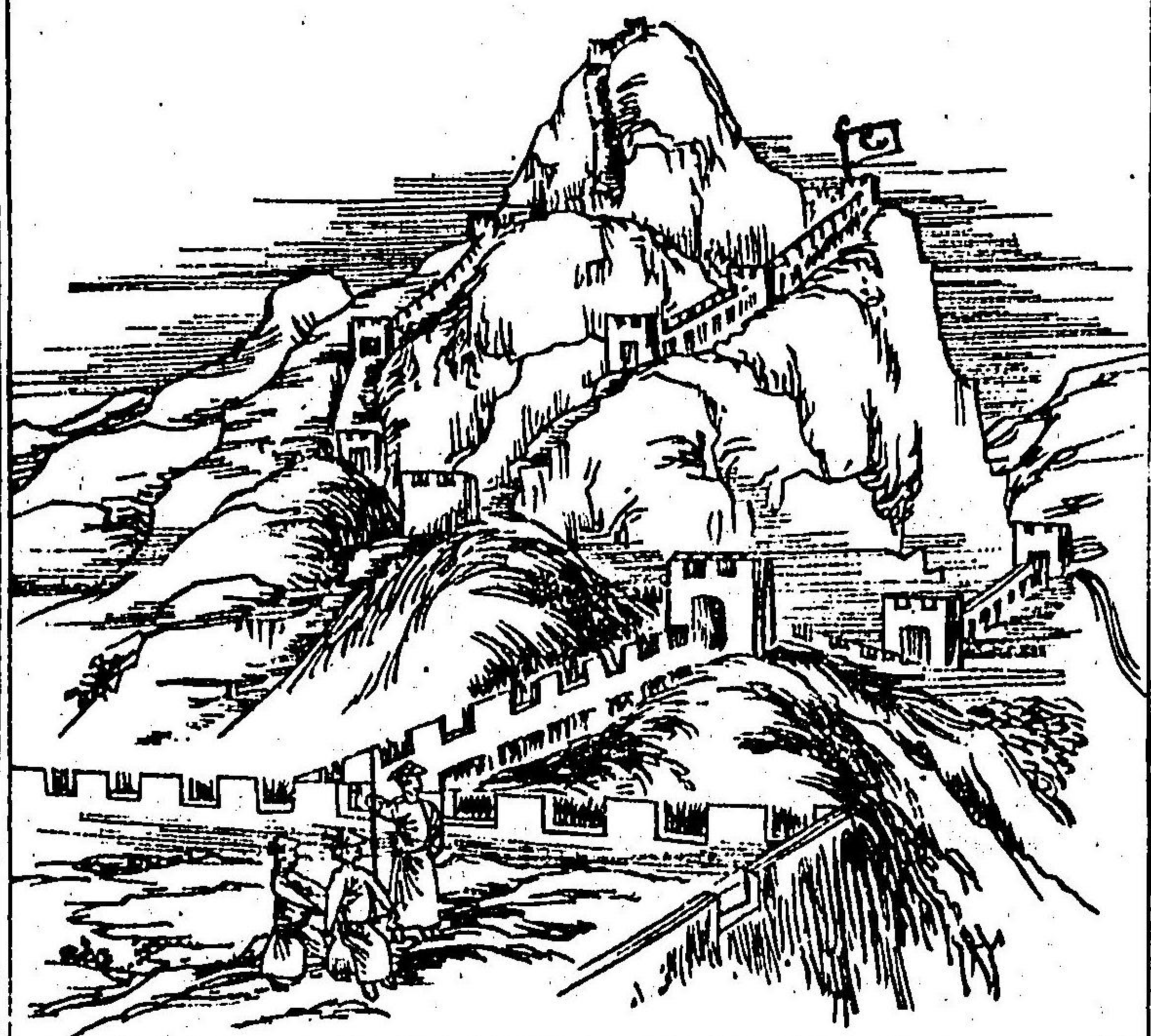
色は梯の層を経て昇をを体をしりて掌上
と出燈の火を照るとりふ是世界七奇の一あり

○支那万里の長城の夏

支那を最も古き国にて西洋諸国いまだ完けざ
る前より人民大に開化し文學は長し武威盛なり
て遂に教國は分ち各々獨立して権威を振ひ相
互に戦争し其内勝敗も数回ありしが西曆紀元
前三百年の頃位より即ち玉ふたの秦の始皇帝と

りる君の出でより悉く此國々を討伐し皆自
分の幕下とふし一天下と定め玉ひ国家漸く太
平小向へり然るに又鞏鞏國より屢々攻来り領
分を掠る等のあは多し此は於て此害を禦ぐん
と種々心慮を旋り遂に大土工を起し萬人知
る処の万里の長城と称せり天下第一番の城壁
を築造せり其東を遼東山海關の海濱より起り
て直隸山西の兩省を跨り黄河を踰へ西の方
と陝西甘肅の兩省を跨り北嘉裕関に至りて止る

支那方里の長城の高



其長さ五百里
余は連亘り其
間より山川を
横断り其高さ
処々直立五十
丈余の山頂小
達し或は下つ
て深谷を亘る
其城壁の高さ

二丈五尺其厚さ一丈五尺余其外面を皆四角
る煉火石を疊て之を建築し内部を土を以て塗
塞め上の両端より凸凹形の胸壁あり其間を函
道よて騎馬武者六騎此城壁の頂上よ在る函道
を並び馳るといふども更な衝觸るの恐ありと
りふ又六十間毎に堡寨を備へ弓形の小門を設
け要害の地より寨壁を二重或は三重に築造す
実よ二千年余前よ建築せしものありと雖ども
現今尚依然として存在す旅客一覽して今よ之

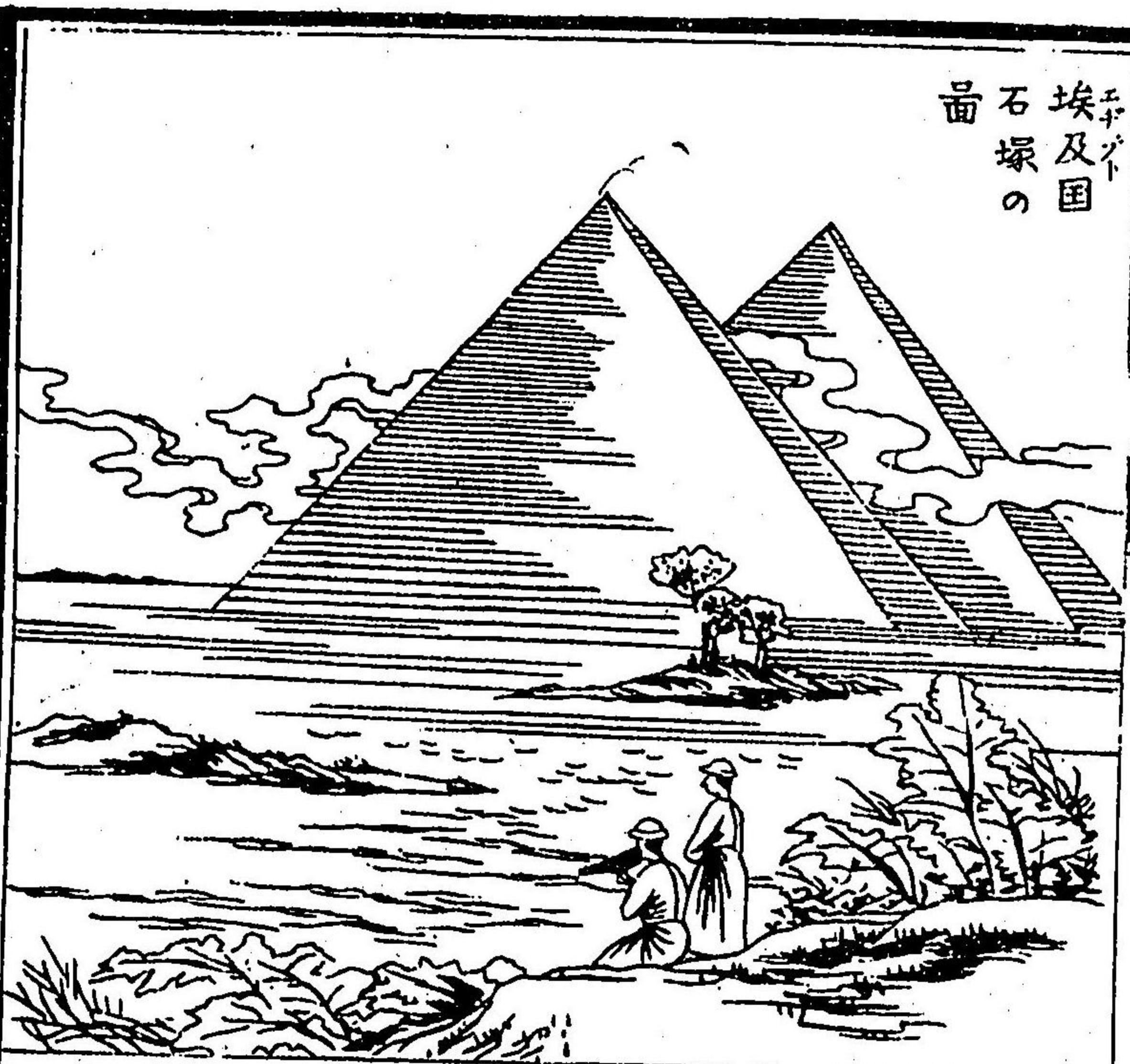
を驚うざるものあり是れ世界七奇の一方あり
 往古支那國權威の隆盛なる斯の如し然るを今
 一至於開化進まずん却て国力微弱とあり往古
 夷狄禽獸と稱せし西洋諸國の爲は國土太は蠶
 食され取めを受るゝと頗る多し呼鳴世の變遷
 するを察を登し

○埃及石塚の事

亞非利加洲の内埃及國の介尔阿といへる処に

近くピラミードと稱せる奇形の石塚大小とも
 又數多あり大抵をニールといへる大河の西畔
 よらして或は一所に群集し或は六七十里の間
 所々散亂を其形を左の圖の如し亭より
 塔より粗塚の如く皆石より壘上げ其基礎
 を四角として其直徑大なるものに至ると十六
 丈余頂上を尖りて甚だ高くニール河の水面より
 空中に聳るゝと凡十六丈四尺是れ大古の城より
 りとりふ者ありきども其下は古人の棺を以

埃及國
石塚の
圖



て察まきバ死人
の廟なるべし実
に幾千年前より建
る処のもののなる
う其證據を得て
知るべからんと
りへども其奇絶
なるまゝと旅人一
見して驚うざる

者あり是世界七奇の一ありといふ
曾てヘロドヌスといへる人埃及國に到りし時
メムフェイスといふ所の僧は此石塚の事を尋りて
此僧經文より出点りりとして答へ其説は西曆紀元
前九百年の頃今百年前九二五と埃及國の王ゼラ
プスといへる人の建築して之を建ふに日々十
万人の工夫を以て貳十年掛りし其宏大推て
知る處し此石塚中の地下に室あり其室の周囲
に洞穴を廻りて地下に覆桶を通りてニール河

の水を引き此室を周流せしむ是ゼラプス王死
 せる所及んで此処に葬りたる廟ありといへり
 次の石塚をゼラプス王の弟よてゼラプスの後
 を継ぎ多るセフレントの王の建築よて弟三
 の石塚をゼラプスの子とせリニスといへる人
 の建しとのありと
 近年に至て此石塚中の地下を掘りカニール河
 の水面より凡二丈程地下に至て其材木等を数
 多し出多りけきどりゼラプス王の墳墓ありと
 出

見えざりしと云ふ

又此近邊に石を造たる長大の奇なる人形は

埃及国石塚
 の近辺に在
 る異像の番



り遙く之を望む宛に
 絶大の女子地中より
 首を出せるに似たり
 今半身砂の中へ埋
 りて其形何物たるを
 みるに只地上へ出
 処を首より頭計なき

ども其高さ二丈七尺余其後之を掘て見る小石
 小造多る大なる獅子の上小跨り其足の間
 石の屋のりて其形廟宇の如し是を以て察せ
 るよあれし矢張死人を葬りし廟なるべしとい
 ふ
 此国今も人家あきか如くの荒野とがのふれ
 ども大古三四千年前ふる世界第一番の文明
 国少て名所古跡等も甚ど多し尚二篇も出さ
 べし

○都兒格の死海

東都兒格往古に那の利亞国と云ふ其一部に
 一、プリウスと云ふ嶋あり此嶋の内は奇ある湖水
 あり其水清浄にして甚だ鹹く大小の魚類皆生
 ざるものと能く故に之を英語にて「デッド・シ
 ー」ト云ふ海と死の海と云ふ美しき翻譯して死海と云ふ
 其岸畔は常に塩芒の凝固を見る又試す物を
 投込ると至て重き物もろくざれば沈まば砂石の

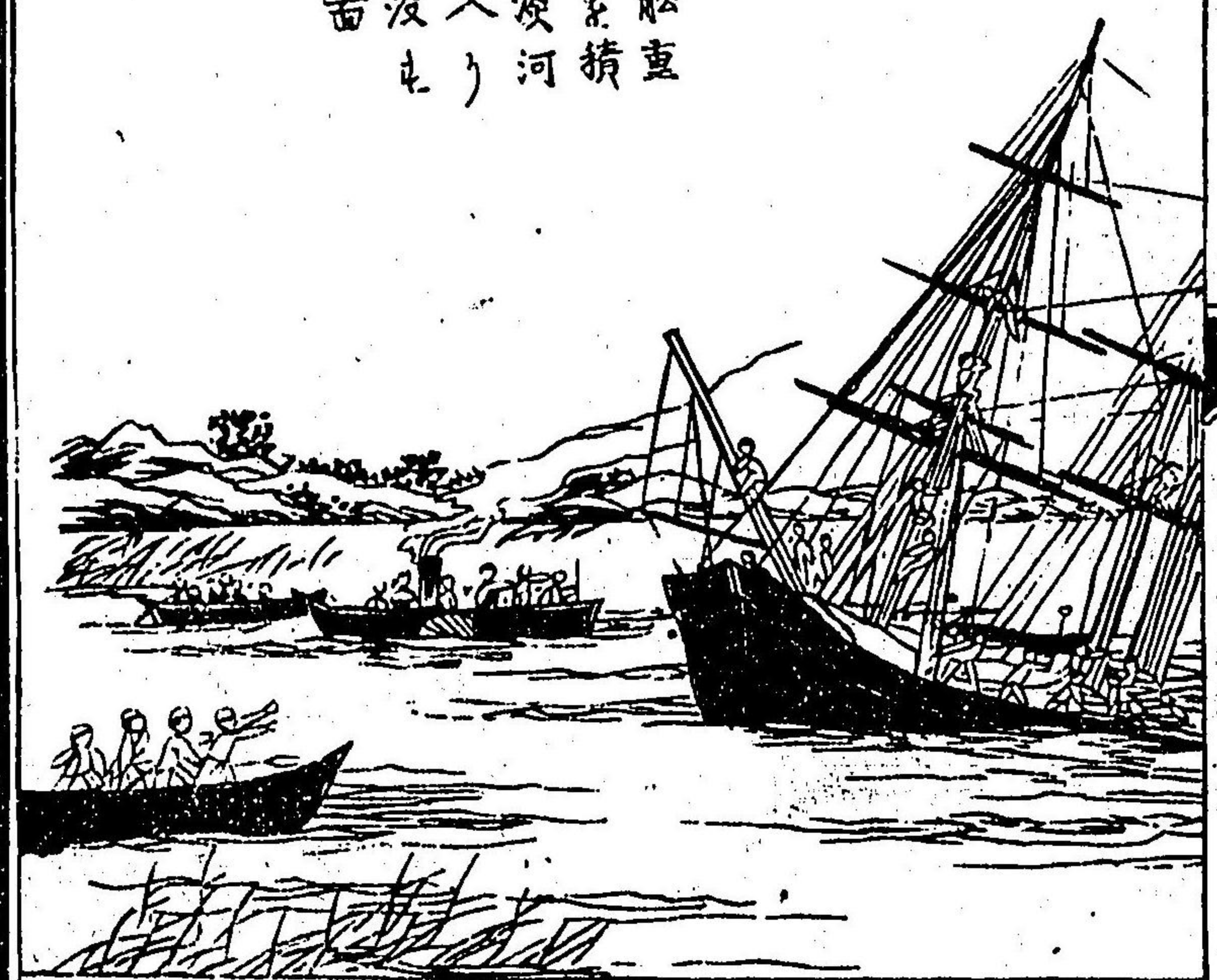
類皆淨お実よ奇とソよべし其近傍よ到り其蒸
氣よ逢ふ時々衣袂まが絶よ卑濕を覺ふ其後二
三日を経て其衣袂皆腐壞る相傳てソよ此
地大古を繁盛の国土ありしが其人民大よ惡事を
あし或ら威ふ男色を行ひ多く天よ叛ふ此於て
上帝大よ怒り玉ひ硫火を以て悉く之を焼滅不
せりと此湖水夜間不至ま鬼の哭声を聞ふ似
多り故よ土地の人之を魔地とソよ或る者其理
を究んと群り往て覘伺するふ日落てソよ大

8

奇の声起り嘯く如く如く甚だ悄悲して
誰恐れざはものあし之を尋るふ声々唯樹間
りつて形あし今よ至て夜間と此邊よ宿さる者
あしとソよ実よ不思議とソよべし是世界七奇
の一ありとソよ
右大石も沈まざるハ何故ある歟諸説區々小し
て真よ其理を知るべうに故よ今唯簡短よ水
の質を論ぜん扱洋海の水を味ひ苦くして鹹し
赤道よ近き処の海を最も鹹し二十四斤の水中

万国一統 卷之二

洋船重荷を積て淡河に入りし番に沈没せし



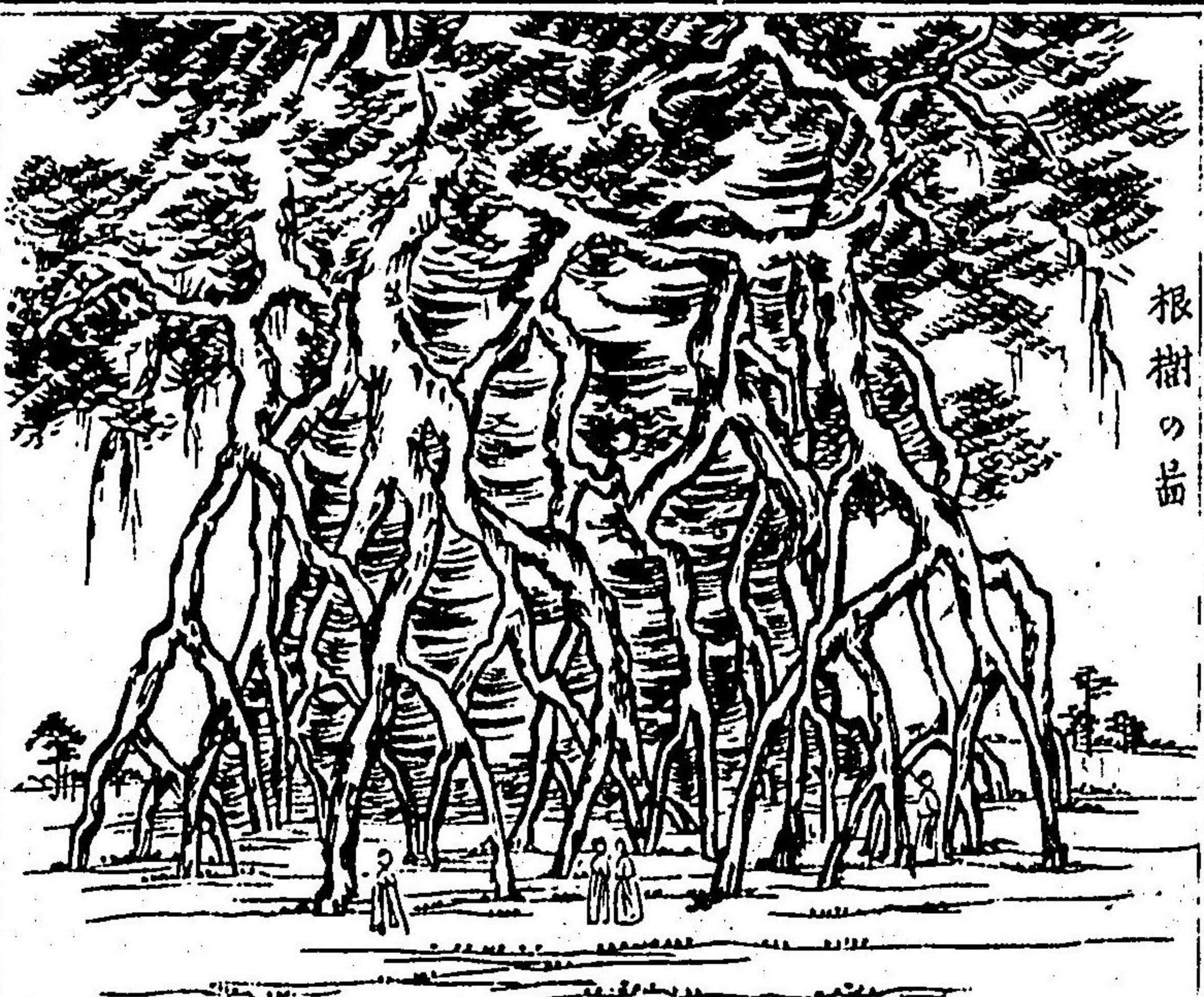
生鹽一斤のり
と若し鹹水と淡
水とを以て其力
を比較する小鹹水
を必だ力強く物
を抵抗するの勢ひ
まゝに随て多し淡
水を必だ力弱
物を抵抗するの勢

ひまゝに隨て少あし故に洋船淡水の河に入りて
荷物を重載せ一度鹹海に出せば船底軽く浮上
りあくと必だ一尺余あり是鹹水を物を抵抗する力
の強き證據あり又外洋ゆて過分は重荷を積込
一度淡水の河に入れば船必だ沈み溺る是等
の理水夫を勿論人各々知らざる可らば

○根樹の夏

南海中南緯十三四度西経百六七十度の間は

島の島嶼群集を此島の一部分に世界中最も奇に
 なるべき一種の樹有り土人之をオレノ島に其
 始生の時を他の樹木より異なるものなるを
 漸々長びるに及んで漸々枝の上小細條を生じ
 纏々として下小垂れ地に至るに即ち根を生じ
 年を経るに從ひて直径大凡二尺位に至り斯く
 の如き根数限りなく連結りて遂に大なる林
 を成す枝葉を蔭々として高さ天に参りたる如し
 其周囲二里をよぶもの有り遂に其幹の太さ



根樹の岳

直径大凡八丈余に
 至るもの有り遠
 方より遙く小之を
 望むに宛り巨大の
 蝙蝠傘を他の万木
 中の上より閑き一
 如し此樹斯く林を
 成す時を枝葉上を
 覆いて屋宇に異ふ

とび土人此下に住居するものありと実又奇木
とりふ登し

○瑞士国巨燹雪中埋たる人を救ふ事
并又犬の人小切なる事

西洋各国よてを犬を愛する事最も甚し
或る一疋の犬を求る小百兩乃至二百兩の大金
を擲と此有り実又無益の様あれとも其犬の功
りも小至てを突小男子も及バざらば事有り
豺狼狐行等皆犬の属ひよて孕胎六十三日小し

て生み産後十日よて眼を開き四ヶ月よて
歯を出し二年よて長定まり牝牡交合飲食を
哺乳を皆同トけまども其性は善悪有り剛柔有
り其最も善よてよく人小馴るゝものハ則ち
西洋人の愛する犬あり此大おりまゝ色々の種
類有りて其小あるを犬と云ひ大あるを狗とい
ひ最も大あるを獒と云ふ○犬の切らるゝ事一
あり或る車を牽り羊を牧ふ有り人を救ふ
あり夜を守り有り盗を捕る有り賊獵をまゝ有

り警を相りたり
 瑞士国と意大利国との境にシントベルナルド
 とり峻嶺有り此邊を総て山国として其山脈數
 千里に横たはる故に兩國相互に交易するとの
 無余義此嶺の間を往來を然るに此國ハ寒氣
 甚だ厳しく春夏秋冬とも山の頂上は雪の消る
 ことあし冬の間山中俄に寒を生ずる時ハ旅人
 其寒瘴は感し迷倦を覚へ慄々として路傍は昏
 睡し遂に雪中に埋めたり者有り又山中あり

俄に大雪降出た時を急ぐんとさるるに進まずに歸
 くととさるるに路遠く進退其場は究り遂に雪に
 埋めらるる者有り又春先雪解の時分ハ山の
 上より雪の巨塊滑落して往來の人を埋る者など
 多く少くは
 此國の中富家にして且仁らる者仲間を結び冬
 の間に此山の頂に家を建巨燧を置くを畜置て之
 を救ふ其仕方まづ燧の身は毛織の衣服を纏ひ
 頭は酒樽を懸け傘を四方に出して燧を其命に



端士国の中
 大雪中
 埋りたる人を
 掘出したる番

彼ひ四方八方の
 行ふ雪の裡に人
 の埋きたるを覚ゆ
 きを即ち焚き雪を
 控肥て之を出し其
 側は蹲り守り其人
 の醒す酒飲て漸く
 温を覚え衣を着を
 俟て焚き返り去る

其人若し凍死して醒うざる時を焚即ち走て其主
 小報さ或る靈契有り曾て二十二人を活かむ因
 て或る人大金を損し銀を鑄て以て其頸ふを免
 其銀は文字を鑄りて其功を賞せりとりふ
 北極の地方魯西亜邊を綿互數百里の廣莫と
 する荒野あり此邊を世界中の最も寒き處と
 て冬の間を更な青草の頭する處あり其雪の深
 きあり數尺是を眺望むれを恰も銀の海の如く
 旅人路の尋ぬべきあり此邊の犬をよく方角を

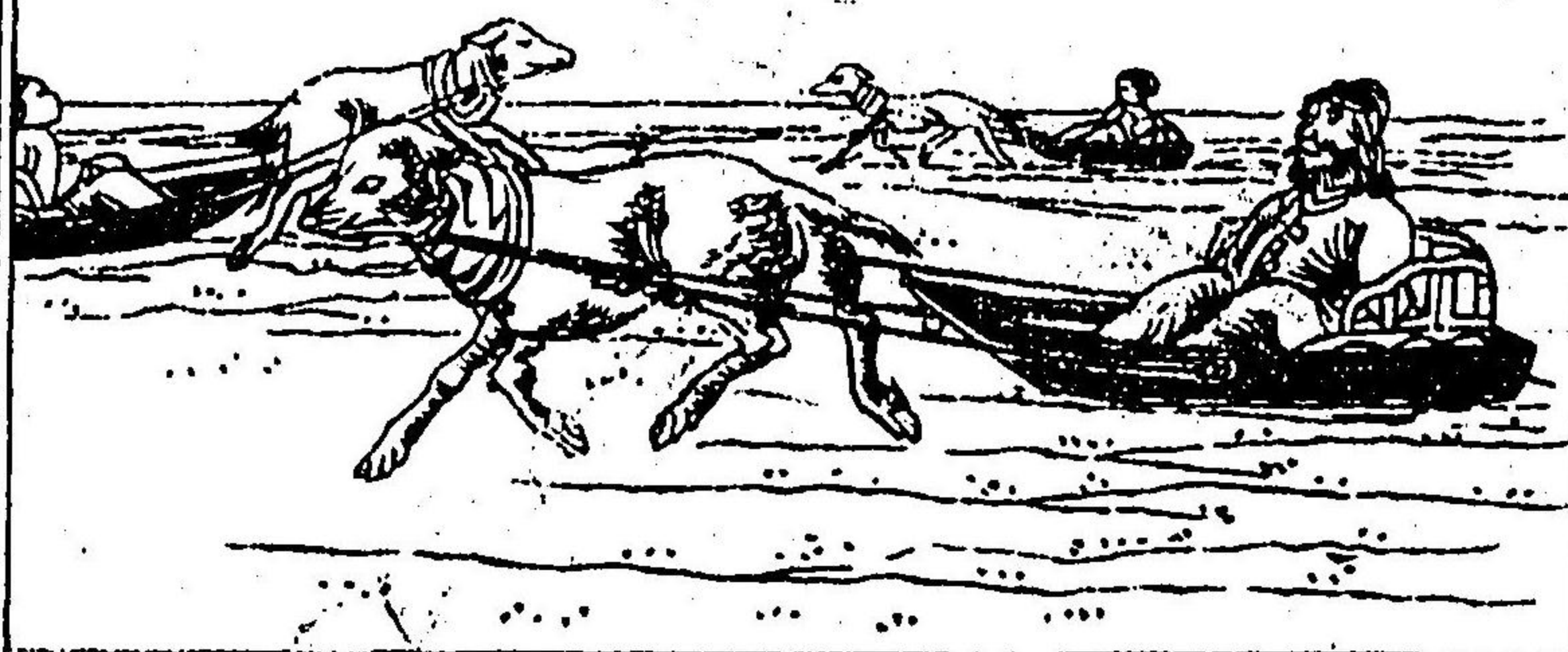
M. J. G.

西 洋 羊 飼 育 野 畜 畜 畜



牧羊の生計をなす者なり
 或は羊數十を一群とす
 或ハ数千を一群とす
 之青草のりる方を尋て
 先や到り日を山に牧
 ひ夜を野に宿す故に此
 牧羊を必だ多くの犬を
 育て以て巡邏とあは
 し羊を失ふあはしき

北 極 地 方 の 犬 車 乗 り 野 廣 旅 畜 畜



知り且よく橇を牽く遠
 く人の及ぶざる処あり
 故に旅人を必だ犬車
 藉て指南をなせ登り
 一否ぐざれを途に迷ふ
 の恐きなり此大を車犬
 と名く其切實は大小
 ○ 西洋諸国は多く羊を

を即ち犬を喚け指使して尋ねむる可し
失ひあはし是を救犬と云ふ

○又一種善く物を嗅ぐ犬有りもし盗賊家に入
ると何處を主人其足跡を嗅ぐも百里の外とい

へども亦よく追付て之を獲る或る羊を盗する
家有り其牧主大をして其賊の跡を嗅行らし

む犬を其命を後ひ且つ嗅ぎ且つ行き果して賊
を数十里外に於て獲るまといり

○或る醫者病家へ往き歸路よして跛犬を見付

呼んで之を引き歸り試み小薬を以て其足は敷

け治さ小數日よして愈ゆ因て命け其主家は返

ふしむ其後一年余を経て其犬は二の跛犬を

引き醫の宅に到り尾を揺りて療治を求むるの

様をなす故に醫者再び薬を以て之を治し愈し

むよ二犬乃ち耳を戦げ相並びて拝謝するの様

をあして去きり

○佛蘭西国よてる衣服の立肌あるを好み身の
清淨なるを尚小故に香などり一々墨膠を以て

佛蘭西の府
香探五火
を使人の
汚を皆



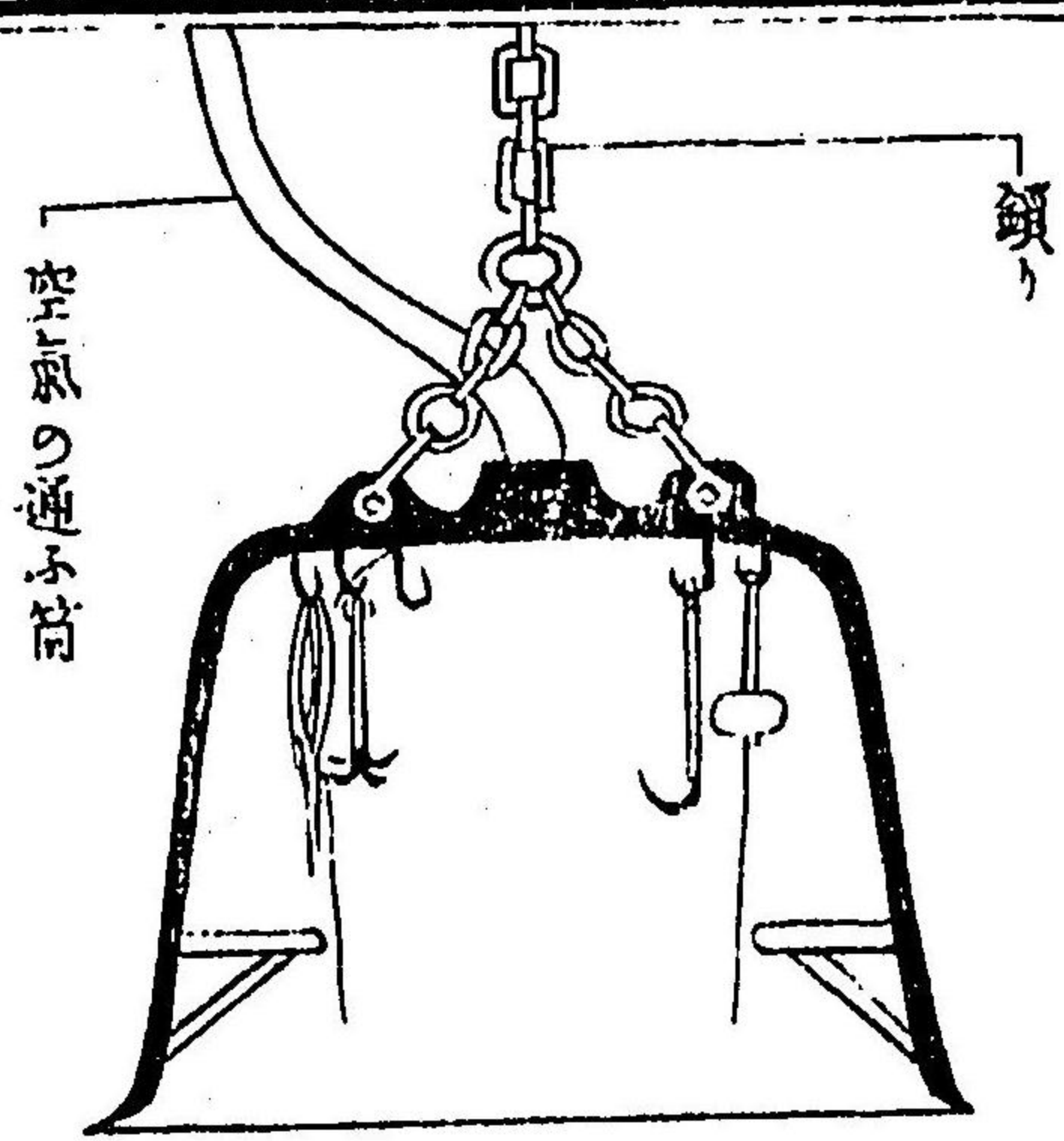
磨き管滑あつては是
を以て路の傍より吾
国の雪駄直一の如き
人の皆を磨擦して生計
とくる者有り或る人
頼り皆の汚き一を見
て数銭を出し之を擦
りむ少く行及
んで香復汚るゝあ

前の如く無余義復く擦りてむるも其汚多し更
まゝ前の如く何故なるかと心を留めて瞻顧する
一の小犬頻ふ来て繞らぐを見る是全く香擦用
の使ふものあるを悟り且其犬の慧きを喜び遂
に大金を出して之を買求め英吉利又連往りか
其犬逃て蒸氣船に乗る萬里の大洋を渡り故主
を尋帰りしとぞ其外水中に墮ちたる小兒を救
或は書翰使をおし或は買物に到る等犬の人小
功ある更甚だ大おして盡く速く故より冥国

熱國を問うれば天下人ある地なる必き大なり是
天の人を衛つしむる所以あり

○入水器の度
デバイングベル

西洋ふて海底不落し多る財物を採り或ハ珠を
撈ふ等の為海底に到る道具を發明せり之をデ
バイングベルといふ物空氣を物を抗抵ゆる力
甚ぞ多し試小椀を倒さよ覆せ水中に押込と虽
も水敢て椀の中よ入らざ故小椀の中温るちと



入水器の内部切斷面

ふし是中空氣外の水を拒て入りめざる證拠
あり水中入らざる時人其中に在て水底に

到り自由な作用をベ
きの理ありテバイン
グベルも此理を基き
て發明し多るものよ
て其高さ五尺許口の
廣さ八尺許鑲めて鐘
の形小造り下の方ハ

開放し、て頂より四の窓を開け、玻璃を嵌込て光
 を通し、鐘の内頂より数寸の鈎有りて、此処より繩鉤



等)の如き種々の道具を懸け、又鐘の内旁より二の
 腰掛有りて、人此処より坐せ、是を用へんとする時
 ら先づ工人を鐘の内より坐せしめ、然る後船の旁
 より鎖を以て水中より下を扱、水上より次第小
 下を押し、三丈四尺より下より到るまで、水の力甚
 強く、空氣之を押し、海水を鐘の裡に侵入せしむ故
 ら三丈四尺より深き底に到る時、更に空氣を
 増し、務めて空氣の力と水の力と相均しうらし
 む、但し鐘の内尺よりゆるぎ空氣を容る、場所多

かゝる故に工人内より呼ばれ其空氣
隨て減じ然る時新しき空氣を更換せしむ工人
ハ必む鐘の内小死を其更換の法を船の上の人
龍吐水の様ある空氣を集る道具を以て絶て管
より海底の鐘より新しき空氣を送る故に鐘の下
を開放しおきども内の空氣外の水を拒て水少
しり入るおとあく工人中より在て絶へば新しき
空氣を呼吸聊る温且死する等の恐れあり且
つ海水澄渡り日の光を透し水底より在とも猶白

日の如く故に工人鐘中より在て言語を上り傳へ
んとする時其訳を板に書きて以て之を浮せ
此道具を發明してより水中に橋の基礎石を築
く或は破船の物を拾ひ或は珠を採り総て水
中の工職ハ皆此道具を用ふ実ニ奇なり

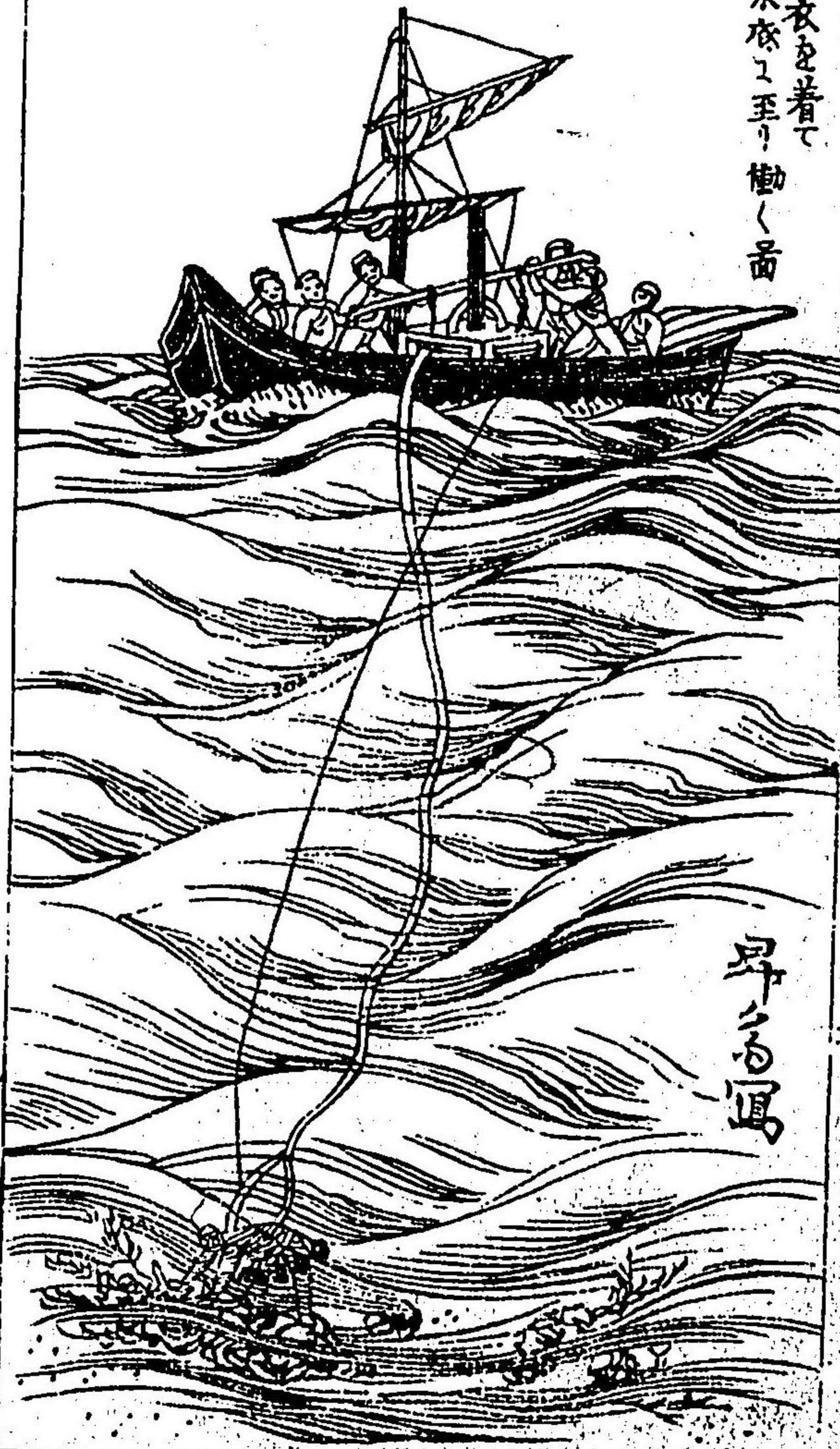
○入水衣の事

方今日日本より山船来せるゴムとり物あり
是を印度国より生かせる大樹の膠汁を採りて煉り

製するものにて萬物小用ある甚だ切なり其
質堅韌くして水火も傷るゝと能く刀鋸も入
り難し長さ一寸のもの之を引けを一尺余は
至り之を放せば復々縮んで故の如く久し
て變りに壞まじ實に他物の比ぶべき物あり西
洋人の襪帶胴メ等皆此のゴムにて製す水中小
入る衣もまた此のゴムを以て造り其衣を頭よ
り足に至るまで密ふして縫目なく之を脱が
ゆる人の脱売の如く肥々者も瘦多るものも皆同

く着べく左右の腋下に筒なり此筒より空中の
空氣を口に通じ兩目を玻璃を鑲みみて光を透
し腰に鉛の重を纏ひ足に鍍金を着て水中に入
り水少く入りあつて水底に落至てより前
章の如くデバインガミルの裡に腋下の下の筒を
入きて其生氣を呼吸し古船軍の時此衣を
着て水中に入り敵船の底を鑿き多るものと
其他珊瑚を取り珠寶を探る等ふる至極奇妙
ある仕掛あまど折々波の爲に腋下の筒紐屈

入水衣を着て
水底に至り働く面



早急の風

て空気の通路を絶ち水中小死するものなり是
と前のデバイングベルより此の事を余程危き仕

夏あり

萬國奇談卷之一終

萬國奇談

卷之一

廿二

022209-001-1

特31-599

万国奇談 一名, 世界不思議

青木 輔清/編

M6

ADA-0648

